Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-04-04

北イタリアのドイツ語言語島、チンブロの里を行く

林, 良子

(Citation)
Brunnen,502:3-6

(Issue Date)
2016-12

(Resource Type)
article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003736

北イタリアのドイツ語言語島、チンブロの里を行く

林　　良子

北イタリア、ベネト地方北部を中心として分布するチンブロ語（独:Zimbrisch, 伊:cimbro, 原語:tzimbris, tzimbar、ここでは日本語で表記しやすいイタリア語の発音を言語名に使用する）は、北イタリアにおけるドイツ語の言語島であり、11 世紀～ 13 世紀ごろにバイエルンから南下して定住した人々の話していたことばの名残とされている。この言語は、主にベネト地方のヴィチェンツァ（Vicenza）県のセッテ・コムーニ（伊 : Sette comuni, 独 : Sieben Gemeinden「7 つの集落」を意味する)、ヴェローナ県のトレディチ・コムーニ（伊 : Tredici comuni, 独 : Dreizehn Gemeinden)、トレント県のルゼルナ（伊 : Luserna, 独 : Lusern）に分布している。南チロルのドイツ語圏を別として、北東イタリアには、チンブロ語の他に、南ドロミテのもっとも奥まった谷でフェルゼンタール語（独 : Fersentalerisch, 原語 : Bernstoler）が話されていたことが知られている。これは、チンブロとは別のルートをたどってこの谷に行きついたとされ、付近の集落とは全く異なったことばを話すことから、モッケニ（Mòcheni, 独 machen に由来）と呼ばれてきた。その他にはオーストリア国境付近で、Plodn（独:Pladen/Bladen, 伊:Sappada)、Zahre（独:同じ)、Tischlbong（独 : Tischelwang)、Kanaltal などで話されることばがドイツ語の言語島とされている。しかし、ドイツ語言語島として最大のものはここに紹介するチンブロ語であろう。私とチンブロ語との出会いは少々複雑な道のりをたどる。

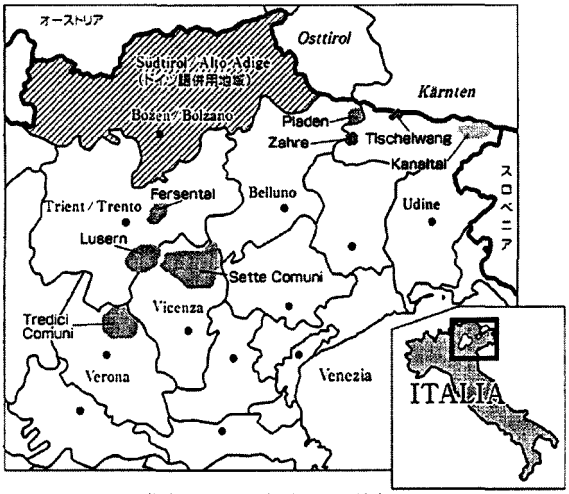
もう 20 年ほど前の話になるが、東京外国語大学大学院の修士課程在学時に、私の指導教官の山口幸輔先生がお亡くなりになり、一般言語学を担当されていた富盛伸夫先生のもとで修士論文を執筆することとなった。富盛先生は、レト・ロマンス語研究で高名な方で、当時ちょうどイタリアから帰国されたばかりの、レト・ロマンス語の一つであるフリウリ語を専門とする山本真司先生とともに、フリウリ語と富盛先生の特にご専門とするスイスのロマンシュ語の中間に位置するもう一つのレト・ロマンス語であるラディン語の勉強会を開催されていた。ラディン語の辞書や解説の多くがドイツ語で書かれていたことから、よかったらこの会に顔を出すようにと誘っていただき、私も何の気なしに参加するようになった。イタリアのドロミテ・アルプス地方のラディン語は、南チロル地方に多くの話者を持ち、そこではドイツ語とイタリア語とラディン語の 3 言語が併用されているという事実に驚き、そして何よりも写真で見るドロミテ山塊の美しさに惚れ込んでしまい、右も左も分からないラディン語の勉強会に出席し続けることになった。折に触れて、遅くまで大学に残って一緒に夕食を食べたり、ゲストを招いてお話を聞くこともあり、当時

東大にいらっしゃったPeter Giacomuzzi先生に南チロルの二言語併用状況についてお話を伺ったりもした。また、偶然にも参加者のお一人と勤務先が同じだという山川和彦先生からこのチンブロ語地域のお話を聞くことになり、北イタリアにはレト・ロマンス語だけではなくドイツ語系の少数言語があることを知り、興奮を覚えたことを昨日のことのように覚えている。

それから数年して、ミュンヘン留学の際に、ぜひ北イタリアのこれらの地方に行ってみたいと思い、イタリア語も学ぶために、タンデムパートナーとして知り合ったイタリア人学生と最後には結婚することになった。彼はヴィチェンツァ出身で、姓はフォンガロ。これはチンブロ語のvon Ungarnにあたると言う。ヴィチェンツァの北部の山には、Fongaraという地名があり、Fongaroの他に、Ungaro、Ongaro、Ongher、Bungaroといった同源の人名もしばしば見受けられる。昔、ベネチアから見て山の向こうから来た人々を総称して、「ハンガリーから来た人々」と呼んだことがこの名字の始まりとされているそうである。今は、自分の家族の名前となってしまった名であるが、確かに夫の親類の背格好は、私達が思い描くような典型的なイタリア人像とは違い、どちらかというとドイツ人のイメージに近い。皆、背が高く、金髪で碧眼の従弟もいれば、ミュンヘンのビアガーデンのウェイトレスを思い起こさせる豊満な叔母もいる。

ようやく本題である。ヴィチェンツァ、パドヴァといったベネチア近くの北イタリアは、山に囲まれた盆地であり、夏に大変蒸し暑くなる（だから稲がよく育ち、リゾットが郷土料理となる）。そのため、この地方に住む家族は、夏に避暑、冬はスキーのためにと、ヴィチェンツァ県の北部の山間部に別荘を持つことが多い。夫も幼少から、夏になると暑さに耐えかね、金曜日の夜や土曜日の朝から別荘へと向かい、夏休みは数週間にわたって滞在するという生活をしてきた一人である。この山間部こそが、チンブロの里であり、ドロミテ・アルプスの南側に1000m級の高地が続く、プレアルプスと言われる地域である。ヴィチェンツァの中心部からは車でわずか1時間ほどで到着する。この高地はアルトピアーノ（Altopiano, 独：Hochebene）と呼ばれ、セッテ・コムーニの村々がある。中心は、チーズやハチミツの生産で有名なアジアーゴ（伊：Asiago, 原語：Sléghe）で、作家リゴーニ・ステルン（Mario Rigoni Stern, 1921-2008）の生まれ故郷でもある。

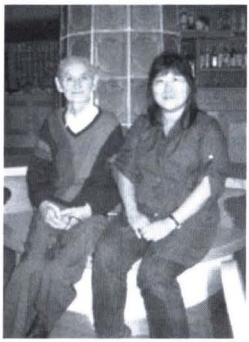
リゴーニ・ステルンは、レーヴィ（Primo Levi, 1919-1987）と並んで戦争文学の大家として知られるが、アルトピアーノの自然や歴史、風土に関する物語や随筆を多く著し、2003年にモンダドーリ社より彼の全集が刊行されたことで、この地方の独特の文化がイタリア中に広く知られることとなった。リゴーニ・ステルンの作品は、現在5作品が日本語にも翻訳されている。代表作『テンレの物語』（飯田熙男訳、青土社）では主人公のテンレが国境を越え、いくつもの言語を操り、行



北東イタリアのドイツ語言語島
(https://de.wikipedia.org/wiki/Zimbern より著者改変)

商や出稼ぎで生計を立て、戦時を生き抜く様子が描かれている。リゴーニ・ステルン自身も、第二次世界大戦中に東部戦線に送られ、ロシアから悲惨な退却を余儀なくされた。戦争末期には捕虜としてグラーツの強制収容所に捕らわれ、そこから徒歩でアジアーゴまで帰郷したのであった。ちなみに、主人公テンレ・ビンタルン（Tönle Bintarn）の Tönle は「小さなトニー」（イタリア語では Tonino）である。名字はドイツ語の Wintern で「冬の人」を意味する。チンブロ語ではドイツ語の v [f] も w [v] も b となるため、多くの語に b の綴りが用いられるのは興味深い（例：viel → biil, Wasser → basser, Vater → baatar, Frau → bràu）。『雷鳥の森』（みすず書房）等、3 作を訳した志村啓子さん（2010 年に急逝）、ご主人の古賀弘人先生（元北大教授）と知り合い、わずかながらでも翻訳のお手伝いをさせていただいたことも幸運な出会いであった。

アルトピアーノは、今では避暑、スキー客でにぎわうリゾート地であるが、1866 年に最終的にイタリア領となるまでに、しばしばオーストリアとの間で国境線が引き直された前線であり、第一次世界大戦時には激しい戦火にさらされた。特に、オーストリア軍の Strafe-Expedition により、1915 年頃には村々は完全に破壊された。戦後は、文字通りの焼野原で、草木一本も残らず、あるのは不発弾と死体だけであったと土地の人々は語り継ぐ。戦後、生活は困窮を極め、村を捨て、中にはアメリカやオーストラリアなど外国にも移住していく人々も増えていく。1943 年には、イタリア国内でドイツ軍、ファシスト対パルチザンの内戦が始まり、平野


マリオおじいさんと

部から逃げ込んだパルチザンを追いかけるファシストたちとの戦いの場と化した。

夫の家族が小さい別荘を持つ、セッテ・コムーニの７つの村の一つ、ロアーナ（伊：Roana, 原語：Robaan）にはチンブロ文化研究所（Istituto di cultura cimbra）がある。小さな博物館にもなっており、近年ではチンブロ語の歌のコンサートや、チーズ祭りなども行われるようになってきた。しかし、つい数年前に、とうとうロアーナで唯一のチンブロ語話者であったマリオおじいさんが亡くなった。観光のために、チンブロ文化を前面に押し出しはじめた矢先に、チンブロ語がほぼ消滅してしまったのは何とも悲しいことである。マリオさん自身も、チンブロ語の完全な話者というわけではなく、小さいときに自分の両親や近所の人たちが話しているのを聞いたので、聞いたらわかるし、小さいときには少し話すこともできた、ということであった。隣に住むエルピデおばあさんも昨年亡くなった。ロアーナの昔を伝える人々の姿が急に消えていくようである。ただ、エルピデの孫の一人であるエンリコ・ファブリス（Enrico Fabris）が、2006 年トリノ五輪のスピードスケートで金メダル２つ、銅メダル１つを獲得するという快挙を遂げたため、ロアーナの村の入り口に彼の偉業を伝える記念碑が建ち、村はずれにある小さな池の横にスケート場が建てられ、整備されたおかげで、村は別の賑わいを取り戻し始めている。

私は 2006 年と 2010 年にイタリアで出産したが、長女が生まれた病院は、アルトピアーノの麓にあるティエーネ（Thiene）という街にある。長女は難産で、昼から次の明け方近くまで陣痛に苦しんだ。陣痛に耐えながら、ふと、夫とともに窓の外に目をやると、アルトピアーノの山肌に朝の光があたり、白々と夜が明けていくのが見えた。生まれてくる子供と一緒にいつかこの山でスキーや山登りができれば、とその時に思った望みが、今ではかない、当時のことを思い出しては、子供達と毎年ロアーナを訪れることができる今をうれしく思う。ちなみに次女は、ヴァルダーニョ（Valdagno）という、別のチンブロの集落（があった）、トレディチ・コムーニに近い村で出産した。娘たちは、自分にもチンブロの血が流れているから山が大好きなんだと嬉しそうに言う。

（神戸大学教授）

林　良子　著　　【新刊】初級文法読本

4 ステップドイツ語

2 色刷　B5 判　88 頁 + 変化表　CD2 枚付　2,500 円 教授用資料あり